

映画『えんとこ』上映と伊勢真一監督講演会

主催：筑西市 後援：下妻地域人権啓発活動ネットワーク協議会・筑西市教育委員会・筑西市社会福祉協議会
朝日新聞『天声人語』やテレビ朝日『徹子の部屋』でも紹介された、寝たきりの男性（元養護学校教諭）と介助の若者たちの3年間にわたる日々を記録したドキュメンタリー映画『えんとこ』。その上映会と、その制作にあたった映画監督・伊勢真一さんによる『障害者と若者たち』をテーマとした講演会を行い、ともに『人権』について考えるイベントです。 ■ 問い合わせ 市広報広聴課広聴係 内線314

2/10土

12:30 開場 13:00 開演

明野公民館大ホール
イル・ブリランテ

車イス席もあります。利用希望者は事前にご連絡ください。講演会には手話通訳があります。

天声人語

「自分を見つめ直したくなる映画だった」と知人が言った。この夏のことだ。その映画をようやく見た。『えんとこ』（伊勢真一監督）である。▼東京都世田谷区に住む遠藤滋さん（五二）と、彼を取り巻く若者たちの交流が、一時間四十分にわたって淡々と、実に淡々とつづられる。一人暮らしの遠藤さんは、重度の障害者で寝たきりだ。日常のあれこれはいっさいできない。若者たちが一日三交代で、介助を続けている。▼女子高生がいる。バンドに夢中の長髪の青年がいる。中国からの留学生がいる。介助者はつねに不足がちだ。それでも何とかやりくりし、バトンは途切れず手渡されてきた。そのことに、まず素直に感動する。これまでの「卒業生」は、千人を超えた。▼卒業生と呼ぶのは、遠藤さんの部屋が小さな学校に似ているからだ。「えんとこ」とは、「遠藤さんのいるところ」であり、「縁

のあるところ」である。若者たちは遠藤さんを助けてきた。しかし遠藤さんも、若者たちの心を支えてきたのだ。卒業生の一人の詩（へも）しあなたが健常者だったら、出会うことがなかった。私は相談する人もなく、一人悩み続けていたのかもしれない。▼仮死状態で遠藤さんは生まれた。ありのままのいのちを生きていることが、人生の始まりだった。手も足も使えるものは全部使って大学を終え、念願の養護学校の教師になる。が、障害が進み、退かねばならなかった。そしていま（寝たきりを引き受けて生活してみたら、これが何と面白い生き方だったか、本当に感じますね）。遠藤さんは再び教師になった▼『えんとこ』は各地で自主上映中。問い合わせは上映委員会へ。映画の最初、遠藤さんのことばはよく聞き取れない。でも次第にわかってくる。たとえばそのとき、観客は自分を見つめ直すかもしれない。

映画監督・伊勢真一さん

昭和24年生。作品は『奈緒ちゃん』などの長編ドキュメンタリーのほか、旧下館市の広報映像『心ありき 陶芸家、にんげん板谷波山』『ふるさと幻影 洋画家 森田茂の世界から』（全国広報コンクール映像部門特選）『大いなる志 医人 中尾喜久の歩み』『髹漆 職人大西勲のつぶやき』など。



編集後記

お節の昆布は「よるこ（んぶ）」、煮豆は「まめまめしく働く」など、いろいろな由来がある。今年の干支「亥」の象徴は、『勇氣と冒険』。縁起話にあやかり、久しくしまい忘れて幾久しいチャレンジする気持ちを、今年はポッケから出してみよう。（も）

『おっこ』こと渡辺良子さんを取材。タイプライターの『◎』などの文字を重ねて打ち、1枚の絵画を完成させるタイプアート。気の遠くなるような作業が必要だ。渡辺さんが全力を傾けた作品たちを、みなさんもぜひご覧になってください。（8）

12年前の亥年には阪神淡路大震災や地下鉄サリン事件が発生し、その後の社会に長く暗い影を落とした。この教訓を生かし今年が猪（亥）のように、力強く、たくましい日本の幕開けの年となるように願いたい。（ま）



葉ぼたん（写真は切り花用の初紅）市内では11軒の花き農家が栽培。出荷の最盛期を迎えています。